



毎朝チャペルに賛美歌が響きわたる全校礼拝

授業参観

— お邪魔します —

# 敬和学園高等学校 高校3年「選択聖書」

キリスト教主義学校でも、受験時期が近づくと、週1回の「聖書」の授業を負担に感じる生徒は多い。ところが、敬和学園高等学校の3年生には、「必修聖書」に加え、週に2回の「選択聖書」が大人気！校長の小西二巳夫先生が担当するこの授業にお邪魔しました。

授業の冒頭、「敬和に来て

何が変わった？」との問いかけのあと、卒業生の作文が紹介された。

—— 中学時代に関心があつたのは成績。テストは何点かいくつ「5」があるか、自分や友人をそういう観点からしか評価できなかったが、敬和の3年間で見方が変わった。勉強がでなくてもスポーツ万能な人、いつも笑顔で優しい人、廊下のゴミを率先して拾う人がいる。友だちを尊敬するように変わった——

ここで聖書へ。第2コリント12章9節。「……むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」

そして小西先生はシエル・シルヴァスタインの『ぼくを探しに』（倉橋由美子訳、講談社）を取り出した。一部が欠けた円である『ぼく』が、欠けた部分を埋めるカケラを探して

旅に出るといってお話だ。

「選択聖書」の授業は、いわゆる聖書講読ではない。前期は、映画「スタンド・バイ・ミー」や「だれもしらない」

（灰谷健次郎、あかね書房）、「夏の庭」（湯本香樹実、新潮文庫）などをとりあげ、主人公が経験する、生きることに伴う痛みについて考える。それを踏まえて自分を見つめ直し、夏休みに自分史をまとめる。後期は、自分史を一人ひとりが発表し、またその発表を聞いて考えたことを内面に照らしてレポートにまとめる。受け身ではいられない。自分と向き合い、友人の経験を受け止めるには、痛みも伴う。

生徒による本の朗読が終わると、「こうだったらもっと生き生きできるはず、と思うこと、あるよな。先生の場合は、あと24cm。俺の身長どこへいった！」とクラスを笑わ

せる小柄な小西先生。

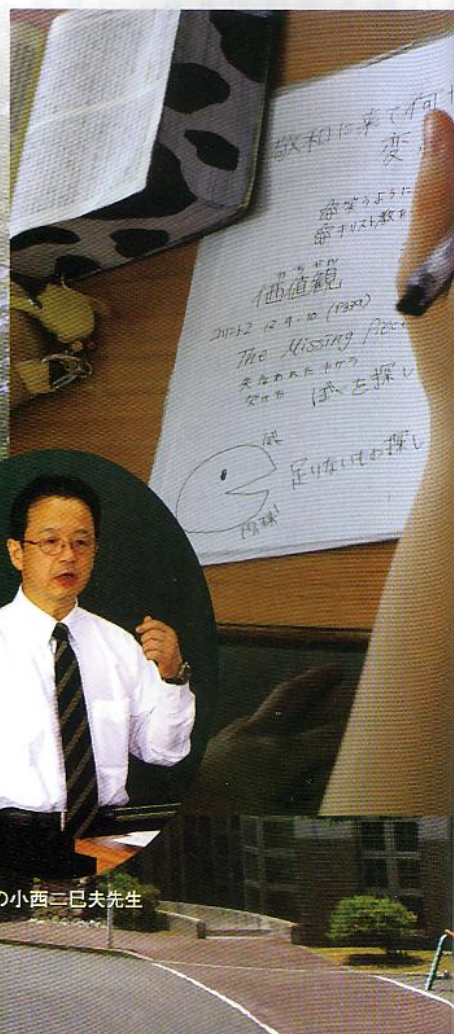
「でもな、この主人公の個性はここや」と『ぼく』の欠けた部分を指すと、生徒たちはぐっと身を乗り出した。皆、欠けた方は違う。それに気づくか、受け入れられるか。個人のレベルで、また、社会のレベルではどうかと、たたみかける。

聖書に戻り、「この箇所は『弱さを受け入れる強さ』があるということ」と説く。言い換えるとそれは「共感すること」で、さらには「人間らしい人間になる」こと。これが敬和学園のモットー「自分探し」であり、学園で実践されている。一人ひとりの存在価値を認める、という価値観だ。たとえば、英語は習熟度別クラス編成だが、「上級クラスの評点5」と「基礎クラスの評点5」はまったく同じ価値を持つ。すなわち「全体の中の位置」ではなく、「持

てる力を出し切ったか」が問われる。

生徒たちは授業の面白さを、「校長先生の『先生』としての話と『人間』としての話が聞ける」、「ものごとの見方が変わる」などと語る。「この授業で身につくことは？」と聞くと、ある生徒が「敬和を卒業した後、生きていく力」と答えた。聖書を学ぶとは、現実の人生を支える「生きる力」、すなわち「いのち」が聖書に証しされていると知ること。出会った高校生たちは、その真理に気づき始めていた。

（文・栗山のぞみ）



校長の小西二巳夫先生

【学校DATA】  
敬和学園高等学校  
所在地 〒950-3112 新潟県新潟市北区太夫浜325  
校長 小西二巳夫（元日本基督教団正教師）  
理事長 後富俊夫（元日本基督教団総会議長）  
課程 全日制課程 普通科（男女共学） 定員1学年200名  
沿革 および特徴 新潟県開港100年記念事業の一環として、県と市から土地が提供され、新潟県下の日本基督教団所属教会および国内外の諸教会の支援を受けて、1968年4月に創立。以来、建学の精神「敬神愛人」のもと、キリスト教に基づく全人教育を行う。自立と共生を育む「寮教育」にも定評があり、全国各地のみならず、新潟市内から入寮する生徒もいる。

